

< 研究成果の紹介 >

「カラ」の高糖度果実安定生産要因の解明

紀南かんきつセンター

1. 成果の内容

「カラ」は4月から5月に出荷される柑橘類です。全国的にも産地はあまりなく、近年高級カンキツで売り出している東紀州地域の目玉商品です。しかしながら、収量が少ないこと、収穫果実の品質にバラツキがあること、かいよう病に非常に弱いこと等、高糖度の果実を安定的に生産していくためには、いくつかの課題をかかえています。

そこで、場内露地栽培「カラ」成木の基本的な生育状況（果実肥大・果実品質の推移、着果部位別果実品質、収穫時果実品質等）を調査しデータ化することにより、高収量・高品質果実生産を行うための要因を解明しようと考えました。

果実肥大は10月下旬まで旺盛です。また、収穫時の果実横径は満開後80日以降の果実横径との相関が高いことがわかりました。従って、満開後80日以降になればある程度、収穫果実の大きさを予測できるため、サイズ摘果を行うことができるようになります。

果実の糖度は2月下旬から3月上旬に最も高くなり、その後減少しました。クエン酸濃度は冬期にはほとんど変化しませんが、3月上旬から再び減少しました（図）。糖度の減少及びクエン酸濃度の再減少の時期は3月上中旬頃であり、果実の二次肥大が始まるころとほぼ一致しました。糖度は収穫適期にはややピークを過ぎますが、酸との

バランスによる食味重視で適期を判断する必要があります。収穫時の果実横径と果梗枝径・果梗枝長との相関を調査したところ、果梗枝径との間に相関が高いことがわかりました。品質との相関は高くありませんでした（表）。従って、大玉生産による収穫量の増大を図るためには、果梗枝径の太い果実を残す方が良いと考えられます。

2. 技術の適用効果と適用範囲

カラ栽培を行っている地域で、技術を適用することができます。適正摘果を実行し、大玉生産をすることで収穫量が増大し、高品質果実生産を実現することができます。

3. 普及・利用上の留意点

防除、施肥等の基本管理を徹底しネット施設などを活用して、かいよう病の発生や冬期寒風による落葉を防ぎ、樹体生育を健全にすることが大切です。「カラ」は他の品種に比べて、開花期が遅く生理落果の終息も遅くなります。着花量・新梢発生量を見極めて、摘果作業を行うことが大切です。高糖度果実を安定生産するための栽培技術（適正着果量・水分制御・短期冷蔵を含めた貯蔵方法）については継続して検討していく予定です。

（鈴木 賢）

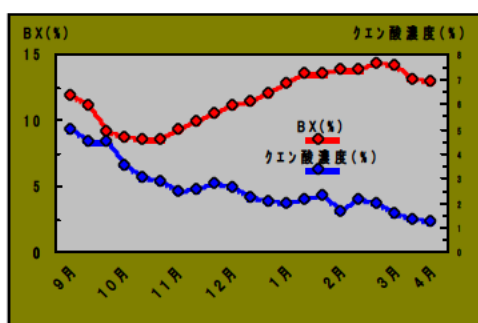


図 果実品質の推移 (H10)

表 収穫時果実における各要因の相関係数

	果実横径	果梗枝径	果梗枝長	糖度	クエン酸濃度
果実量	0.974**	0.696**	0.503**	0.267	-0.318
果実横径	-	0.739**	0.564**	0.232	-0.291
果梗枝径	-	-	-	-0.018	0.125
果梗枝長	-	-	-	0.285	0.101
糖度	-	-	-	-	-0.030
クエン酸濃度	-	-	-	-	-

注) **有意水準1%で相関あり。